

第29回シンポジウム

日 時 平成21年1月29日(木) 午後2時～5時
場 所 アルカディア市ヶ谷 東京都千代田区九段北4-2-25
テーマ 親と一緒に子育てを 子どもが育つコミュニケーション
座 長 前川喜平先生

講 演

1. 「コミュニケーション保育の実践」
私塾まきば代表 山田 雅井先生
2. 「発育に寄り添う保育」
神奈川県立保健福祉大学大学院保健福祉学部教授 小林 正稔先生
3. 「子どもが育つコミュニケーション」
慈恵医科大学名誉教授 前川 喜平先生
4. 総合討論

前川 皆さん、こんにちは。短時間ですけれども、皆様と一緒に勉強したいと思います。

人間の祖先が類人猿というのはご存じですね。いまから約600万年前、チンパンジーから人間が分かれました。現在の人類の祖先のホモサピエンスがあらわれて20万年です。現在、類人猿の仲間地球で繁栄しているのは人類だけです。その秘訣は何かと言うと、人間だけがお互いに支え合って共同作業をするからです。

その共同作業の基本が、非言語的あるいは言葉によるコミュニケーションです。インターネットとかケータイとか、生活様式が著しく変わって来たのがここ二、三十年です。皆様は生活が変わったことが、人間そのものは進歩したと錯覚していませんか？ 人間の脳そのものは、本当は変わっていないのです。ですから、いまこそお互いに支え合ってコミュニケーションをとらなければいけないのだと思います。

子どもは「ふれあい」により育つと言われていました。大人、子ども同士でのふれあいによって子どもが育つ最も大切な場所が保育園であり幼稚園なのです。今日はそういう意味で、「親と一緒に子育てを—子どもが育つコミュニケーション」というテーマを取り上げました。

本日お話しする三人の先生方は、ご自分のいままでの思いで理想のことをお話しいただきます。その話を聞いて、皆様は、「うちの園ではダメだ、できない」とかではなくて、肯定的(ポジティブ)にそれをとらえていただいて、ぜひ、どんなことでもいいですから、できることがあったらそれをやっていただいて、子どもが育つ保育につなげて戴くことを願っております。

それでは、最初の山田雅井先生です。保育者は子どもや保護者にどのように接したらよいか、親と一緒に子どもを育てる原点、保育の原点について、これから話をいただきます。山田先生は、学校法人「ステパノ学園・幼稚部」勤務で、私塾「まきば」代表で、理想的な保育を行っている方です。

では、先生、よろしくお願ひします。

山田 皆様、こんにちは。理想のかどうかわかりませんが、一人ひとりの子どもたちと「ああ、楽しかったね」と向き合い、「あの子はこうだったね」「この子はこうだったね」「明日はこうして見ていってあげようね」ということを、毎日、職員の人たちと話して、最終的にはゲラゲラ笑って一日が終わる毎日を過ごすことができますことは、本当に感謝のことだと思っております。中身に関しては、私もちょっと自信はありませんけれども。(笑)

大磯(神奈川県)の駅前にあります「エリザベス・サンダース・ホーム」という養護施設を澤田美喜先生が戦後まもなく設立し、その敷地の中にホームの子どもたちのための教育施設である学校法人「聖ステパノ学園」(教会、幼稚園、小学校、中学校)をおつくりになりました。現在は広く外から通学生を受け入れ、きめ細かい教育を行っています。

私は以前、そこに勤めておりましたが、澤田先生が召された後、外の小さな幼稚園で15年ほど仕事をいたしまして、もう一度、ゆっくり一人ひとりの子どもたちを見ていきたいということで「まきば」という小さな幼稚園をつくりました。休園していた学園内の幼稚園に間借りという形で引越してきたのは6年前のことです。小さな幼稚園でも、始めるときにはかなりの葛藤がありました。時代の流れの中で、子どもに変わりはないけれども、ものすごくお母様方の考え方が多様化していることや、自分本位の思いを集団生活の中にぶつけてくるようになった初めの頃だったものですから、そのことを受けとめていかれるかということに非常に悩み、戸惑いを感じたわけです。でも、小さなところで、「ここで育てたい」という方々のために、一緒に育てていけたらいいなと思ってつくりました。そして今年、12年を迎えております。そこで毎日、何に気をつけて過ごしているかということをお伝えして、少しでも皆様のお役に立てたらばと思っております。

(1)子どもとの信頼関係の構築

私たちの園はすごく小さいものですから、一人ひとりとの関係がとても近いんですね。まず、初めて子どもと会います。そのときにその子が、私という、お母さんでない、初めて会う保育者、先生という立場の者を本当に信頼して、ここで楽しく過ごせるんだ、甘えていかれるんだと思ってもらうことです。子どもが、お母さんがいなくてもここで自分は受け入れてもらえるんだという信頼感を持ってもらうこと、そこがまず出会いの始まりです。

ですから、泣いている子もいるし、やたらに自己アピールする子もいるし、周り関係なく遊びに飛び込む子もいるし、いろいろな子がいます。けれども、まず、その子のあり方に寄り添っていく。そして、本当に安心していいんだ、自分のままでいいんだという気持ちになってくれたときから、ここでの集団生活を楽しんでいこうねというスタートラインにつくことになります。それは、三日でできる子もいますし、三カ月かかる子もいます。幼稚園ですので、うちの場合は三年保育で、満三歳からお預かりしています。三年保育ですと、一年間かかって、やっと、その子らしさをそのまま受けとめていかれるようになったなとよく思います。でも、その子に合わせていきたいと思えます。とにかくその関係が持てたら、卒業までの残された時間をその子のためのプログラムを考えつつ、本当に寄り添って楽しんでいくことができるようになります。

挨拶で育つ

朝、まず子どもたちが入ってきます。バスを使っていませんので、お母さんと子どもと二人で来る人が多いです。もちろん兄弟のいる人もいますが、例えば「 ちゃん、おはよう」と、必ずその子の目を見て、名前を呼んで、そして「おはよう」と、本当に笑顔で子どもたちを受け入れること、それが朝の一つの大事

な仕事だと思っています。そのときに顔色が悪かったり、「何かちょっと変だなあ」と思ったり、いろいろな表情をしたりしますね。また遊びの中で、ほかの先生たちと、「ここ最近、ちょっとこうなんですよ」ということを話し合うと、そこに気をつけていくことができます。

そのようにして、まず子どもの目を見て、笑顔で受け入れる。「あなたのことを待っていたのよ、今日も一緒に遊ぼうね」と、心から子ども一人ひとりを受け入れるということ。忙しくても、できるだけその子の名前を呼んで、おはようと挨拶を交わすことができたならば、まず1日目、その子の名前は1回呼ばれたことになります。確実に「あなたがここに来たことはよかったね」と、受け入れることができます。私たちもそのことを覚えられるし、子どもも自分の名前を呼ばれて、「飛び込める場所があった」ということを確認することができると思います。

でも、どの子どももみんな「おはよう」が言えるわけではありません。隠れる子もいますし、横向いてしまう子もいます。でも、いいと思います。無理に言わせる必要もないと思います。ともかく私たちのほうから、あなたを待っていたよ、今日もよく来たね、という気持ちを心を込めて受け入れてあげること、それがまず第一だと思います。

また、お母様やお連れになった方と、「おはようございます」と言葉を交わすこと。当たり前のことのようにですが、きちんと笑顔で向き合えるということが以外と流されてしまっていることが多いのではないのでしょうか。1日が始まるという一つの礼儀を大切にすることで、スタートの押しボタンが入ると思います。

この「挨拶」ということは非常に大事だと思っています。子どもたちというのは、大人以上によく周りのことを見ていて、すごく気を遣ってくる子もいるし、何一つ気づかずに過ぎていってしまう子もいます。気づいた子に、「ゴミ拾ってくれてありがとう、ちゃん」と言うと、気がつかない子も、「ん？」と、そのことを見たり聴いたりしていると思います。

「ありがとう」と言われた子は、したことを見ていてくれたんだと喜びます。取ってくれて「ありがとう」、片づけてくれて「ありがとう」。やさしい子は知らないところで小さな子の面倒を見てくれたり、また、トイレのスリッパを揃えてくれたり、いろんなことをしてくれています。はっと気がつくとき、先生の片づけも手伝ってくれたりしています。そういうときにも、「ありがとう」、こうしてくれて「ありがとう」という言葉をかけてあげると、自分のした行為を認めてもらうこと、自分自身を認めてもらうことがはっきりすると思います。また、他の子の「気づき」にもつながると思います。子ども同士でも、小さな行為の中で、「ありがとう」という言葉を大切にしていけることを伝えています。実際に子供どうしても当たり前のように「ありがとう」を言い合っています。

「ありがとう」は楽ですが、「ごめんなさい」が言えない子がいます。「うちの子は一度もごめんなさいを言ったことがありません」と言うお母さんもいらっしゃいます。でも、そんなにしょっちゅう「ごめんなさい」でなくても、このことだけは謝らせたいたいというときがありますね。悪いことは悪いとしっかり覚えること、謝ることは負けでもなければ侮辱されているわけでもないことをわかってほしいと思います。でも、教えなくてもその子は、いけないことをしたんだと気づいているはず。気づいたときに、謝ることがどれほど自分の心の解決になるかということ、経験してほしいのです。

しかたなく「謝ればいいたろっ、ごめんなッ」ではなくて、その子と、ちょっと違う部屋に行ってよく話をします。このことはいけないこと、どうしていけなかったのか、どうしてあなたが謝らなければいけなかったのか、謝ることは決して負けでもなければ恥ずかしいことでもない、よく話しますと、(ときどき脅すこともあるんですけど)納得してくれるんですね。かすかな声でも、思わず言ってしまった言葉でも、「ごめんなさい」ができると、子どもがホッとします。そのホッとした顔が私はものすごく好きです。「あ、言えたんだ」というときの、自分の中で解決ができたというときの子どもの心をたくさん認めてあげるのです。

また、子ども自身が謝れたことを確認できたときに、その子は次の人間関係をつくっていくことができる

のです。でも、最初からというのではなくて、いろいろなことを繰り返して、そういう場面も何回か経験して、いままでの経過をずっと見ながら、「このことについては、今日は彼ときちんと話し合おう」という設定の場所をつくる。自分も余裕を持って、そういうときにそういう時間をつくって、彼と保育者とその関係の中で解決を見出してあげる。その場所を、流してしまわないでつくってあげる。そうすると、すごくさわやかに、その子どもはステップを踏んでくれるんですね。そんなことをしています。

それから、食事のときの感謝の心。「いただきます」も、「ごちそうさまでした」も、本当に感謝なんだということ。そして、お食事はおいしかったね、という時間にしてあげたいと思っています。食することは、体も心も健康であるための第一の基本です。そのときに、いたずらしながらとか、誰かが嫌な思いをするというのは、私はとてもよくないと思っています。その子を許したために誰かが嫌な思いをする、そういうのではなくて、みんなが「おいしかったね」と言える食事のマナーを教えると、本当に子どもというのは素直なので、伝わるんです。ハイと言う子もいるし、横向いている子もいますけれども、「思い」を伝えると、毎日の生活ですので、そのことが子どもたちの中にだんだん浸透していくようです。

また、お帰りのときも、さようならと言う時間の前に少し時間を持って、お話ししたり、遊んだり、ゲームをしたり、また、私のところはキリスト教の主義で聖書に基づいて保育していますので、感謝のお祈りをして帰るのですが、「また明日、元気で来てね、待ってるね、楽しいことしようね」という思いを心から持って、「また明日ね」という言葉で帰します。

ですから、本当に要所、要所ですが、挨拶を大切にしていくと、それだけで子どもたちは、自分の存在とか、先生の存在とか、お友達の存在をきちんと受けとめていくための、いいきっかけになっていくのではないかと考えています。

絵本やお話で育つ

それから、これはどこの園でも大事にしていращやることだと思いますけれども、絵本やお話の時間を大切にしています。子どもたちは、お話を作ったりするのが上手じゃありませんか？ ごっこ遊びの中でお母さん役になったり、赤ちゃん役になったり、猫役になったりして、親が見たら嫌だろうなあと思うように、誰かヒモでゆわいて、ニャオニャオと猫語でしゃべったりしますよね。

絵本を読んでもらう時間がたくさんあると、言葉の世界が広がり、子どもたちは情景や気持ちをことばで表現するようになります。単純なお話の繰り返しであっても、毎日のように読んでいて結果のわかっているお話でも、例えば『いたずらこねこ』などは、「池に落っこっちゃうよ、落っこっちゃうよ、落っこっちゃうよ、あっ、落っこっちゃったあ」とか、そういうのを繰り返し楽しんでくれます。

ちょっとおしゃまな子は、字は読めなくても、小さい子に向かって絵本を読んであげたりしますね。子どもの言葉の世界を広げるのに文字はいらないようです。お話の世界で、言葉をたくさん楽しみ、自分の心をあらわすことが上手になってほしいと思います。

年齢が低いときはどうしても自分の思いをあらわせないから、癇癪を起こしたり、泣くことが多かったり、乱暴してわかってもらおうとしますけれども、語彙数が増えて、言葉で表現できるようになってくると、そういう形も減っていくはずです。ですから、できるだけ柔らかい、心をつないでいくお話、感じていくお話。そして、みんながその絵本を見ながら、「ああ、ああ」と言う、同じものを見て聴いているだけで共有していられるお話とか絵本の世界を子どもたちと楽しんでいられるといいのではないのでしょうか。

だから、絵本は心を込めて読んであげる時間、そして、それがいつも手元にあると子どもが取ることができる。できれば季節とか、行事とか、身近なものに合わせたものが周りがあると、お話も身近に感じられます。そこから子どもたちが、言葉の生活を広げていくことができますと思います。

子どもたちというのは子ども同士、結構いろんなことをお話ししているんですね。大人が遠慮してしまうようなことも普通に露骨にしゃべっていますし、家庭のこともペラペラしゃべってくれますし、兄弟関係の

こともしゃべってくれますし、へえー、もっと聴きたいなんていうときもあるくらい、いろいろな話をしてくれます。そこに、お父さんとお母さんの喧嘩ではなくて、お話の世界や、いろいろ経験した楽しいことや美しいもの、いろいろな経験で得たもの、それを言葉を使って遊ぶことができたなら素敵だなと思います。

おもちゃで育つ

どきどきしたり、満足するという経験が多ければ多いほど、豊かな言葉、豊かな人間関係をつくっていかれるのではないかと思います。子ども同士の遊びが満足するために不可欠なのはあそぶための道具です。

子どもたちはとにかく遊ぶことが大好きです。テレビがなくても、一日中飽きずによく遊びます。でも、空想をしたり、なり切るために、環境をつくってあげるのが大人の役目だと思っています。別におカネのかかるものが周りになくても、段ボール一つあることで、布が一枚あることで、子どもたちは見立てることができます。

布を幾つか用意しておいてあげると、布だけで、シートにもしますし、洋服にもしますし、ヒーローにもなれますし、いろいろな形で遊ぶことができますので、自分の身をまとえるような、また、敷いてその上で何かができる空間をつくれるような布が幾つかあると、子どもは、仕切りに使ったり、場所設定に使ったり、役割になり切るためのものに使ったりします。

おままごとにしても、決して高価なものでなくてもいいです。100円ショップのお台所道具でも構わないと思います。あれば、必ずそこでやり取りが始まります。布でつくったお手玉が十個あれば、そこでもうパーティーごっこができます。手作りのもので十分だと思います。なければ、紙を刻めばお蕎麦になります。そこに、「ごっこ」、関係をつくる、つながが必要なんですね。何かつくってあげると、子ども同士でコミュニケーションを取って先へつなげることができます。でも、そういうのが苦手な子もいます。例えば組み立てるものが好きな子、積み木とか車で遊ぶことが大好きな子、遊びに好みがあるようですね。

昔、ある保育園にお手伝いに行ったときに、大きなおもちゃ箱の中にたくさんおもちゃが入っていますが、どのおもちゃをとっても、レールが三つ繋がったと思ったら次はないとか、同じものが幾つもあるけれども微妙に違っていたりとか、どれをとっても満足して最後まで遊べるおもちゃがなかったときがあって、これはちょっとかわいそうだなと思ったことがありました。

だから、粗末なものでもいいですから遊びきれ環境を整えてあげたいですね。最近、ホームセンターなどで木片を売っていますね。たくさんあると、子どもたちみんながそれで遊ぶことができます。一人で三つ、五つ並べたら、次はもうないというのではなくて、満足できるだけのものがそろっているのはいいなと思います。ずうっと並べていくだけで一つの世界をつくっていくことができます。そうして子どもたちが空想していられる、想像していられる「材料」は与えないと、どんなに自由遊びの時間をあげても満足し切れずに終わってしまいます。

ですから、高価なものがあればいいのではなくて、みんなが最後まで満足して遊べるものを、そのとき、そのときで考えてそこに置いてあげられると、本当に子どもたちは満足できると思います。

うちは人数が少ないせいとか、毎年、カラーが違うんですね。「今年の子はあまりごっこ遊びしないね」とか、「今年の子はゲームが好きだな」とか、そういう感じです。細かいゲームを飽きずにやっている子たちには、少し余分にそういうものを置いてあげたりとか、いくら置いといてもさわらない子もいますので、その子のために何を置いたらいいかということを見極めつつ、一学期、二学期、三学期と、出してくるおもちゃも変えていくんです。最初、飛びつきやすいもの、そして、そこで時間をゆったり持てるもの、その子に合ったものを幾つか出してみても、さわらない物は減らして行って、飛びつきやすいものを多く置いていく。

まず入り口は、その子たちに合わせたものを考える。だんだん、もう少し高度なものをやってもらいたいとか、ゲーム類にしても、もっと子供同士でやってほしいものについては、だんだん仕掛けて行って、子ども同士ができるように三学期まで持っていくという形で職員間で話し合って、設定するおもちゃの内容

を変えています。そういう形で、自由遊びを豊かにするためには、大人がどれほど設定をできるか、見極めができるかということが大事だと思っています。

経験で育つ

今は情報が多いですし、テレビでも、本当に素晴らしい自然の色彩が見られます。でも、子どもは経験して初めて学ぶ年齢です。どんなものでも見ただけではわかりませんので、とにかく経験する。そして、自分で気がつくことが大切です。

「まきば」は、山あり海あり、ここでこのことを話すのをどうしようかなと思ったくらい、周りにたくさんあります。毎日、風の音が違います。毎日、空気の香りも違います。どんなに車が多くなっても、またインターネットが盛んになっても、ゲームがいっぱいあっても、本物を感じることはできません。昔も今も、どこにいても命の営みは変わることがありませんから、周りにある命あるもの、自然のもの、本物をできるだけ経験し、五感をフルに働かせているいろいろなことに気づいてほしいですね。すごく狭いところでも花壇をつくってお花を育てるとかできると思います。うちの幼稚園の中には、メダカや、ドジョウがいます。田んぼからとったドジョウですけれども、生き物はできるだけあったほうがいいと思います。好きな子は、じっと毎日飽きずに見ていて、大人が感じないものまで感じています。そういう、生きているもの、人間の手ではつくれない自然のものが周りにあるということ。そして、気づいていくということ。大人も、いればいいのではなくて、そのことについて学ぶ。うちの職員は、何か動物や植物に出会うと、お互いに調べながら勉強し合っていますけれども、大人がその生き物に対しての知識を深め、子どもからの質問に答えていっています。時には一緒に調べたりして、より深く興味を持つようになります。動きをずっと見ている子、食べ方を見ている子、大人には見えないものを子どもは気づいていきます。

ときどき耳をすまさせて、「何の音が聴こえる？」と言うと、車の音も聴こえるけれども、風が窓に当たる音が聴こえてきたり、雨のときもいろんな音が聴こえます。葉っぱに落ちる雨、壁にぶつかる雨、屋根に落ちる雨、全部音が違うことを、みんなで表現したり、聴き合ったりしています。そういうふうに「何が聴こえる？」と言うと、私たちが気がつかないことを言ってくれたり、また、色探しをしたり、音探しをしたり、言葉集めみたいな遊びを子どもたちとよくします。

例えば、そこに四季折々の感じたものが入ってくると、それがうんと広がっていきます。お母さんたちは、うちの子はまだ字を覚えていませんとか言いますが、「字はできるだけ教えないでください」と言います。字は記号ですから、「あか」と教えてしまうと、折り紙、クレヨンの赤と字の「赤」でもう終わってしまうのです。

でも、「赤を集めよう」といったときに、炎の赤があり、夕陽の赤があり、チューリップの赤があり、みんな違う赤がある。そのことを、この時代に感じてほしいと思っています。たくさん色を集めてほしい、たくさん音を集めてほしい。子どもの体の中に、一生の土台の中に、たくさんの音や色や言葉、温かいもの、血の通ったもの、凹凸のあるもの、そういうものをたくさん子どもたちが集めてくれるといいなあとと思っています。

嫌でも字は覚えなければならないので、年長さんになって学校に行くときに、興味を持った子に覚えなくていいのよなんて言う必要はないので、子どもたちのほうから拾ってきますので、それを実際のもとの遊びの中で自然につなげていってあげる。私たちは、そのように子どもたちに伝えていこうと努力しています。

そうすると年齢になっていくときに、字と学習が、あのときのあの赤、あのときのあの音、それを字となって読んだときに子どもの中にあられてきます。ただ字や漢字だけ覚えたのではなくて、その一つの文字の中にある温かさや、面白さや、音というものが本当に感じられてくると思います。そういう育ちをしてほしいなあとと思っています。

(2) 保護者との信頼関係の構築

保護者は始めてわが子を集団生活に入れるのにさまざまな心配を持ちます。選んだ幼稚園を信頼し、安心して子どもを預けることができるために、どのような配慮が必要でしょうか。

幼稚園選びをしている段階で、園の教育方針をはっきり伝えること、あいまいな言葉でなく、具体的に伝えられるといいですね。よく見て、よく聞いて、保護者の方が納得されて、入園を決めることができたなら、入園後もスムーズに気持ちが流れるのではないのでしょうか。

お母様たちとは、はっきりと言いたいことを言っています。うちの子は字が読めませんとか、あの子は走るけどうちの子は走りませんとか、あの子はみんなと遊ぶののうちの子はみんなと遊びませんとか言いますが、遊べない時代を大事にしてほしい。「観察しているのだから待ってあげてちょうだい。よく見てから遊び出すから、待ってごらん」と。それで待たせて、待たせると、そのうち「先生の言ったとおりでした」ということばが返ってきます。そのひと言が出てきたら、次は言いやすいですね。

だから、お母様に、子どものいいところ、褒めたこと、気づいたことを、「こんなことがあったよ」と伝えていきます。そうすると、「ああ、そうですか」と喜んでくださる。ちっちゃくても、いいエピソードを、できるだけ伝えてあげています。また、困ったことや、家庭でも気にかけてもらいたいことは、よく理解していただけるようことばを選んで伝えるようにしています。

保護者を、思い込みで判断しないことが大事です。お母様は二十年、三十年の過去を背負って今があります。あるお母様は上のお子さんを亡くして、小さなお子さんをこわごわ育てている。その心配と、元気なお子さんを育てる心配とは全く違います。やはりそれぞれの背景がありますので、みんな同じに見ないで、そのお母さんの持っている心配に寄り添ってあげて、そして、「大丈夫だよ」というところを一つずつお伝えしていくと、安心して待ってくださるようになります。十人十色の保護者の方のあり方をよく理解し、子どもを大切と思うように、保護者のありのままを大切に受け入れると、良い関係が生れると思います。小さな心配事でもお母様が安心して職員に相談できる関係を普段から作っていかれるといいですね。

お母様方が頑張っていて子育てをしていることをできるだけ認めてあげたいと思います。お一人おひとりに、「上手にお弁当つくってるね」とか、「今日、お母さんのその洋服素敵ね」とか、何でもないことでも「最近、あのお母様に声をかけてないな」と思って、意識して声をかけ、子どものことを伝えたりしています。



(図1)

図1の写真は、「母の日」の親子の写真です。親子で童歌（わらべうた）をしているところです。「五歳なのにまだ甘えているんです」、「いくらでも甘えていいんじゃない？ たくさんたくさん抱きしめて、子どもがイヤッと言うまで抱きしめてあげて」、「嫌でも親から離れていくから、離れていくまでは甘えさせてあげ

て。それを飛び越えてしまうとあとが大変よ、なんてことをお母さんと話しながら、伝えながら、お母さん一人ひとりを受けとめたときに、お母さんたちは、ああ、そうだ、先生の言ったとおりだったと、学校へ行ってから気がついてくださるんですね。行事等の中で、親子で触れ合う楽しさを共感していただき、園を介して愛着関係の強化を図り、子どもの成長を信じて待つことの大切さを保護者に実感していただくと、保育者と保護者の気持ちが、同じ方向で子どもたちに向けられるのではないのでしょうか。

結果があらわれるまでは、お母様の心配な気持ち、いろいろな思いに寄り添っていく。批判しないでポジティブに考えて、前向きな言葉を返していったらいい。決して否定していかないことが、よい関係をつくっていくもとなのではないかと思っています。コミュニケーション力を最大限に活用することで、元気な保育活動ができると思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

前川 ありがとうございます。お話を聴くと、当たり前のことが多いのですが、だけど、なかなかできないようなお話で、非常に貴重なお話をしていただきました。

前川 それでは、次の小林正稔先生のお話を聴かせていただきます。

子どもにかかわる大人たちはそれぞれ違った立場を持っておりますけれども、子どもに対し共通の思いを持っていけば「子どもに寄り添う保育」が可能である。この観点から、保育士さんが保育の現場で特に気をつけなければならないことのお話をいただきます。小林先生、よろしくお願いします。

2. 「発育に寄り添う保育」

神奈川県立保健福祉大学大学院保健福祉研究科教授 小林正稔先生

小林 今回、シンポジウムのテーマを見たとき、皆さま方はきっと（決めつけてはいけませんが）親とのコミュニケーションのテクニック、ハウツーを知ることができるのではないかと考えて来られた方も多いと思います。私は、大学で、コミュニケーション技術とか人間関係についても教えています。そこでも必ず言いますが、ハウツー、テクニックだけを学んでも、コミュニケーションがうまくいく例はほとんどないです。

(1) コミュニケーションの基本は外見か

もっと厳しい言い方をしますと、人間のコミュニケーションの一番の基本というのは「外見」です。学生にも、まず外見が大切だよと教えるのです。「いや、内面だ」と、大体ブーイングが来ます。でも、内面がちゃんとしている方というのは外見に現われているものです。ということは、皆さま方一人ひとりの「姿勢」が、子どもたちに対してどう向きあっているかということが、子ども達とのコミュニケーションを活性化することになり、さらに、親とのコミュニケーションの糧にもなるということなのです。私は、保育園、幼稚園、また、小学校、中学校、高等学校の先生方にお話しする機会も多いのですが、そのときに必ずお聞きすることに、「先生方、見られているということを忘れていませんか？」ということがあります。

実は、子どもたちからも親からも先生方はいつも見られています。もっときつい言い方をすれば、「監視」されているのです。そこで評価されているのです。あの先生はやさしい先生、この先生は嫌な先生とか、もしかしたらランクもついていて、皆さま方の保護者の中ではもうリストが回っていて、順位がついているかもしれないです。（笑）そういう中で皆さま方はお仕事をなさっているのです。もしかしたら、みなさま方も、子どもたちに対しても同じようにランキングをしているのではないのでしょうか、まさかそんなことはしていないでしょうね？ たぶん、今日おいでになっている保育士の皆さま方はそういうことは考えてはないと思いますけれども、でも、知らず知らずの内に、そうなってしまっているところがあるかも知れません。

(2) 子どもが変わってきているのか

私の持っている役割は、乳飲み子から始まって、大学生、最近はだんだん高齢者が増えてくる中で、高齢者にも対応しますので、人の成長に「縦」にかかわっていく機会をいただいています。その視点で言わせていただきますと、小さい頃、幼稚園などで、きちんとルールを守らせて、きちんとした教育をおこなったと言っている園から来た子は、小学校へ行くと暴れ回るようになってしまう子が多いです。小学校でも、非常に厳しい先生で抑えつけられてきた子どもは、中学校へ行くと暴れ回る子が多いです。まあ、あとは言わなくてもおわかりになると思います。

最近、よく小学校へ「特別支援教育」のお手伝いになどでも行きます。私は必ずと言うほど月曜と木曜日を指定します。なぜかといいますと、家庭の影響が一番出る日だからです。幼稚園や保育園の先生方は、親の影響によって子どもが変わることはよくご存じだと思いますけれども、小学校でも全く同じです。

月曜日とか木曜日は家の影響を一番受けていまして、月曜日の午前中などは、子どもたちは放心状態ですね（笑）。なにか、肩の力がふっと抜けてしまって、先生の言葉も上の空でみんな通り抜けていってしまっています。木曜日は、もう疲れ切っていて、一週間の疲れが一気にでてしまっているという感じです。その子どもたちの親たちを見ると、何とか自分の子どもをよい子にしたいと思って、一生懸命過ぎるタイプがほとんどです。

言いたいことは、皆さま方も気がつかないうちに、同じ年齢の子どもたちを横に輪切りにしてしか見ていないのではないかとことです。そうしてしまうと、できる子、できない子というところだけを見て、「できる子」に合わせて、皆同じようにできるようにしなければならない、それが「良い教育をした」ことになるというふうに思いたい。そういう流れができてしまっているのではないのでしょうか。結果、子どもたちは、自分が持っている豊かな感性をなくしてしまい、ただ周りの流れとか、動きに気を遣うだけの状態になってしまっているのではないのでしょうか。もしかしたら、今日来ている若い皆さま方はほとんどその犠牲者かもしれないですね。

大学でも、何か言うと、「わからない」とか「できない」とか言う学生が結構多いのです。そういう時に私は、「しかたがないよね、君たちは、『考えるな、覚える』って育てられちゃったからね」と、すごい皮肉を言っています（笑）。で、学生たちが納得してしまうのです。それも怖いなあと思っています。

そんな状況のなかで、大人たちが勝手に、「子どもが変わった」と言い出しました。私はもう数十年も子どもにかかわる仕事をさせていただいていますが、昔の子どもはこうだったけれども、いまの子どもはこうだと感じたことは全くありません。

昨今の発達障害などの問題でも、AD / HDが注目されていますが、この状態を示す子どもは昔からいました。ただ、昔はAD / HDと言わないで、一時期はMB D（微細脳障害症候群）とか言われたこともありますし、「落ち着きのない子」「乱暴な子」とか言われていた子どもたちはたくさんいました。そういう子どもたちがいま、クローズアップされて、その子どもたちに対して、適切な支援がなされればよいのですが、「きちんとした支援を」という名のもとに過剰な反応や対応をして、かえって差別を助長するという状態をつくり出している面も見受けられます。そういった「個性」を持って生まれたことは子どもの責任ですか？

どちらかと言うと、大人のほうが変わってきてしまっているのではないのでしょうか。あえて言わせていただきますと、この国というのは昔から、「子どもは大切だ」と言いながら、幼児及び低学年の教育に対してどれくらい力を注いできたのでしょうか。ほとんど個人の努力のみに依存してきただけではないのでしょうか。平成二年までは、小学校も中学校も幼稚園も高等学校も、全て、一学級の人数は同じでした。つまり、一番手をかけ、目をかけ、気持ちをかけなければいけない時期の子どもたちには、少ない人数で対応し、中学に行きますと、一学級二担任制、高等学校は科目ごとの教員も増え、多くの大人が対応する体制でおこなって来ました。

基礎ができていないところにいろいろなものをつめこもうとして、ぐちゃぐちゃになり、行動化すれば、力で抑える。このような姿勢を貫いてきました。その結果がいま皆さま方を困らせている親たちの姿です。言い方をかえれば、見事に「教育」の成果が上がった（笑）、ということになってしまうのです。

(3) コミュニケーションのテクニック

そこでコミュニケーションが必要だということになったのですが、今度はテクニックばかりに注目するようになってしまうのです。コミュニケーションで一番必要なテクニックは、このあと前川先生からお話しただけだと思いますが、「聴くこと」だけなのです。どうやって話をしたら相手が納得できるかということなどは、90%くらい、「ノンヴァーバル・コミュニケーション」と言いますが、皆さま方の態度や姿勢が、相手にどう映るかです、どう受け取られたかです。

態度や姿勢というのは、自分がいま相手のことを思っている内面がそのまま出ているということです。例えば、「どうもダメなお母さんでやりにくいなあ」と思って話をし出すと、相手に「この先生は私のことを嫌っている」というふうにとられてしまいます。嫌っている人に対して、気持ちよく「大好きです」とサインを出す人はいないですね。特に子どもが一番いい判定者なのです。子どもを見ていますと、この先生はちゃんと子どもが好きな先生か、嫌いな先生かがわかります。

アドバイスさせていただくときに、こうやったらどうですか、ああやったらどうですか、というお話をい

っばいします。そうすると、なかには「言われた通りにはできない」とか「無理です」と言い続ける先生がいます。そういう方には私ははっきり言います。「先生、この子、嫌いですね」と。そうすると、途端に慌てて否定するのです。「いいえ、違う、子どもにはすべて平等に」と、もうその時点でおかしいのです。平等に対応しているのなら、できる子、できない子が出現すること自体おかしいことです。すでに不平等な状態をつくってしまっているということに気づいていないのです。

最後は集団生活だからルールが大切ということです。そのルールって誰のものですか、大人が子どもを上手に抑圧し、コントロールして、最後は自分の言いなりにするためのルールではないのか。子どもが生きていくために必要な最低限守らなければいけないことは、そんなにたくさんありますか？ という、何か矛盾したところがありはしないでしょうか。

逆説的に言うと、子どもの力というのはすごいです。 養育のなかで抑圧され、虐げられているのに、素直に育った子どもがどれくらいいるかと考えたら、子どもの力というのはものすごく素晴らしいなと思います。それを一番身近で感じているのは、親と、幼児保育に携わっている皆さま方ではないでしょうか。その「思い」の部分を一一致せたら、どれだけこれからの日本は、世界と言ってもいいですけども良くなるだろう。

いろいろな子どもと接していると、一番欠けているのは、いまの子どもは大人と仲良くなれていないことです。同じ世代の「仲間」とのみ仲良くさせられている。そんなことでは発展するでしょうか。

最初に前川先生がおっしゃっていましたが、人間の歴史というのは、類人猿から始まって、少しずつ少しずつ自分たちがより良くなろうと努力しながら、協力し合いながら発展してきました。前の時代のものを次の人たちが、そこからまた発展させる。「継承」ということをきちんとしてきたから、ここまで来られたわけです。

ここまで来たら人間というのは相当強いもので、人間はすべて強くなければいけないんだ、小さい頃からしっかりと何でも自分でできるようにしなければならぬのだと、「強く」あることを強いられてきている。その結果、自分が強くなれないことを知ってしまった人たちは、どんどん逃げるようになってきています。なんでもかんでも「病気」といって、そういうところに逃げていくという状態を作り出してしまったところも見受けられるようになっていきます。

もともと人間なんて弱いものです。私も含めて、保育とか、教育とか、看護とか、医学もそうですけれども、人を支援する仕事を目指す人間は、基本的に脆弱で甘えん坊のことが多いです。認めたがらない人もおおいですが。ですから、皆で、一緒に協力しあうことで自分たちの力を強くすることができる人が多ければいいはずなんです。要するに一人ではなくて、集まって協力することができれば強くなれるのだということを知っている。だから、この仕事を選んでいるのではないのでしょうか。「お互いさま」という考え方でいい。

そのところがどうも欠けてしまっているようで、人よりも少しでも良く見せるということに必死になってしまっているのではないのでしょうか。結果として、子どもがどんどん萎縮して、自己評価を低くしているとはいえないのでしょうか。そういうことを考えたときに、いま、一番大事なことはベーシックなものを守っていくという姿勢ではないかと思うようになりました。表1の慌てない、欲張らない、明るい、叱れる、夢のある、威張らない、しつこくない、前向きな、待てる、「子どもを好き」、こういうことをきちんと自分がいつも確認していくだけで、子どもたちや親たちとのコミュニケーションというのは自然に発展していくのではないかと思います。

この、「保育」という言葉を「親」とか「教師」とかに変えて伝えても、全部通用すると思います。そういう作りにはしてあります。

(表1) 発育に寄り添う保育

慌てない保育	乳幼児は、それぞれ違った発達の「個性」を持って生まれています。「 歳児だから…」と考えるのではなく、その子自身のペースを守り“じっくり”と経験して行ける環境が発育を促進します。 大人が発達を「引っ張る」のではなく「付き添う」ところが大切です。
欲張らない保育	「這えば立て、立てば歩め、の親心」は理解できますが、だからといって他児と絶えず比較され、大人の一方的な感情で、いろいろなことをやらされても乳幼児にとっては迷惑でしかありません。 発育の準備段階を十分保証するように努めましょう。 目安は「甘え」。 上手に甘えることができる乳幼児は、安心感、安全感が高いので、いろいろなことに、積極的に興味を示します。
明るい保育	当たり前のことですが、褒められることは自信に繋がります。 乳幼児は、自信があると何にでも積極的に興味を示し、チャレンジしようとします。 その為には、乳幼児の発達を心配するあまり、まだできていない発達課題のみに注目し、これもダメ、あれもダメとマイナス思考で乳幼児を観ていたのでは、保育者も息が詰まります。 結果、乳幼児は不安になってしまい、自信をなくします。 できないことを指摘するのではなく、できたことを乳幼児と一緒に喜ぶプラス思考が大切です。
叱れる保育	乳幼児期は、人間にとってとても大切な時期です。 ですので、できるだけびのびと活動できる“自由”を保証することはとても大切です。 だからといって、何もかもいなり、やりたいままに放縱することは、乳幼児の将来を保証することにはなりません。 絶対にしてはいけないことやさせたくないことは「ダメ!」と言い切る勇氣は必要です。 その時は、くどくど理由など言う必要はありません。 叱るときは「強く・短く・後、笑顔」で。
夢のある保育	保育をしていると、どうしても、その子のプロフィール、特に親や家族環境が気になります。 正直、「将来が心配」と思うこともしばしばあると思います。 また、親を観ていると、「あの親の子だから」という心配も湧き起こることは否定できません。 しかしながら、親は親、子は子、決して同じではありません。 また、親と同じに育ってしまったら保育者としての矜持は…。 一人ひとりの乳幼児に「ゆめ」を感じる保育を。
威張らない保育	大人はともすると子どもに対して、「自分のやり方に従うよう」意識、無意識のうちに求めてしまう傾向があります。 しかしながら、それは大人の欲求、欲望であり、乳幼児の欲求や欲望では無いことを自覚しなければなりません。 例え、絶対に、間違いなく子どもの将来にとって有用であると大人が“正義”を確信していることでも、強要、支配と子どもが感じてしまったら、何の役にもたなくなってしまう。 言葉の指示でやらせるのではなく、乳幼児が自ら行動したくなるように環境整備をするのが大人の役目です。
しつこくない保育	大人は時として、それが「子どもにとって必要」なことだからと思いきみ、やらせようと何度も何度もしつこく誘いをかけたたりしがちです。 また、仕草が可愛いからといって、同じ行動を何度も何度も取らせようとすることもあります。 しつこいことは、乳幼児の自立心をそぎ、興味関心を偏らせ、失わせる結果にもなりかねません。 乳幼児期にたくさんの経験ができるようにしてあげるためにも、しつこいのは厳禁! 乳幼児が温和しくしているからといって、同じVTRなどを繰り返し、繰り返し見せるのも、「しつこい」うちに入ります。
前向きな保育	「過ぎたことは、もう戻れない」という人間の原則を忘れ、過ぎ去ったことをいつまでも気にし、悔やむのも乳幼児の発育を阻害する大きな要因になります。 同時に、「また、同じことを」「前にも失敗したでしょう」「何度言ったらわかるの」というような感情も、乳幼児にとっては何の役もない言動です。 いつも「次にはきっと…」という期待をもった保育が大切です。 同時に、乳幼児は失敗をたくさんするものです、決定的な失敗以外は、失敗したときは新しいことを覚えるチャンスです。 保育者は失敗を責めるのではなく決定的な失敗をしないように、小さな失敗の時に「次にはどうすればよいか」をしっかり子どもに伝えましょう。
待てる保育	乳幼児にとって、早くやらせようとするのは厳禁です。 せっかくながらやる気になっても、実際の行動に移るまでには、必ず準備期間が必要です。 保育者は、その準備期間を保証しましょう。 時間は子ども一人ひとりによって違いますので、乳幼児の様子をしっかり観て、焦らせないように「待つ」ことは、大人の義務であり責任です。
「子どもを好き」な保育	親だから、保育者だから子どもが「好き」であることは当たり前だと考えるのは、大人の傲慢でしかありません。 また、「好き」の意味も大人一人ひとりによって違います。 だからといって個々人の感情を統制することもできません。「好き」「嫌い」という感情的な側面で考え保育するのではなく、もっと情緒的な側面に目を向け、乳幼児との相互作用に目を向け、乳幼児と関わるのは、乳幼児とのやりとりが「楽しい」「楽しめる」保育を実践しましょう。 そしてそのノウハウを、親・保護者に伝えることも忘れずに。 乳幼児に上手に甘えることができる保育者は、保育技術を「アート」にできている人です。

<p>以上のことをまとめると</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが自分自身の感性を発揮できる自由を保障する。 ・ルールは最低限で、基本的なものだけにする。 ・その場だけの雰囲気を大切に、後に引かないようにする。 ・できるだけ素朴で、工夫のできる状態を作り出すようにする。 ・時間は余裕を持って、焦らせないようにする。 ・変化に富み、こどもが興味を引く空間を用意する。 ・子どもの発想を認め、空想を否定しないようにする。 ・伸び伸びと身体を動かし、気持ちを解放できるようにする。 ・指導は最低限にし、子どもができないときだけ援助する。 ・評価はできるだけ遅らせ、子どもの感性を認めるようにする。 <p>ということが、重要ではないかと考えられる。</p>	<p>同時に保育者は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもに対する態度、考え方が建設的・激励的である。 ・子どもとの関係において、話し好きで友好的である。 ・子どもの活動に興味を持って参加する。 ・子どもを支配によって服従させようとしない。 ・子どもが自分から行動するまで待つことができる。 <p>という、5つの資質が求められるということも言える。</p>
---	--

つまり、親と保育者、幼児教育者という立場は違って、共通項だけを拾い上げていくと、このようになるということです。これはモンテッソーリだろうが、シュタイナーだろうが、どの教育法だろうが共通するものと思います。細かいテクニックの部分というのは違いますが、その精神を整理し集約するところなるのではと思います。

簡単にまとめると、人を育てる基本は、教育でも養育でも、まず、興味を持ってもらわなければいけないのです。安心できる環境がないところで子どもは興味を示しません。興味を持たないと手を出しません。手を出さないと、経験ができません。経験を積まないと成長しないです。この基本原理を忘れてしまうといけないのではないかと思います。

私の息子はもう成人していますが、その息子が幼稚園のときに、幼稚園の先生から、幼稚園で絵を描かないと言われたのです。それで、「何とか描くようにおうちでも指導してください」と言われました。私は特に反論せずに家に帰りまして、息子に、「おまえ、どうして幼稚園で絵描かないの？」と聴きました。家では、「展覧会するんだ」といって描きまくってましたので。そうしましたら、息子の答えは、ひと言、「だって、あれ描け、これ描けってうるさいんだもん」と(笑)。「ウン、わかった、いいよ」と言って終わりました。

また、息子は四歳で平仮名を書いていたのです。すごいでしょ？ 皆さんが、息子に「お父さんに教えてもらったの？」と聴いてくれました。そうしましたら息子は「ううん、本で覚えた」と答えていました。私は五味太郎の大ファンでして、五味太郎の絵本を、息子が乳児のころからやたらと買い、家に置いておいたのです。そうしましたら、4歳の時に、従姉からお手紙をもらってお返事を書きたいと、五味太郎の『あいうえお』の絵本を見ながら、字を拾って、自分の言葉を字に写して手紙を書き送ったのです。それで書くのを覚えたというわけです。何も教えていないのです。絵本を与えただけです。

これらの視点から、「教育」というものは何か(教育も養育も同じですが)ということを考えて見ることもすごく必要だとも思います。そもそも教育、養育そのものがコミュニケーションをつくるものだと思っています。

まとめて言いますと、一番のポイントは、いかに相互作用を促進していくかということを考えていただきたい。子どもの特徴は何かというと、自分の感情とか思いというのがいっぱい詰まっているのですが、うまく出せないのです。ですから、幼児教育、保育に携わる方は、感性鋭くして、その子どもたちの持っているものをいかに吸い取るか、いろいろ試行錯誤をする。そのことがすごく大事ではないかというふうに思っています。

(4) コミュニケーションは自然微笑

それを促進するためには、今日はコミュニケーションの基本は「笑顔」だということだけはしっかりと持ち帰っていただきたいです。皆さま方がどのような笑顔をつくれるかということが重要だと思っています。我々コミュニケーションを専門にしている人間は、子どもが持つ本能的なコミュニケーションの原点は何かということを知ると、「自然微笑」と答えます。生まれたばかりの赤ん坊が、瞬間的にニコッと笑顔になることです。大人が顔を覗き込むと例外なく反応してくれます。大人がその笑顔に反応しないですと、いつのまにか苦虫つぶしたような顔をした赤ちゃんになってしまうこともあります。

幼稚園、保育園へ行ってもすぐわかります。担任の先生の笑顔が多いクラスは、みなちゃんと座っていて、ニコニコしています。そうではないクラスは、苦虫つぶしたような顔して走り回っています。脇から見ると、すぐわかります。

小学校でもそうです。担任の先生が子どもとコミュニケーションが取れているところは、クラスに私たちが入ってもほとんど動じないのです。ところが、そうではないところは、誰かが入ったというので、一斉にこっちを向きます。

相互作用です。笑顔というものをいかに促進するかということを考えていただければ良いのではないかと思います。子どもの発達だけに目を向けるのではなくて「発育」にも目を向けていただきたいということです。「発育」という言葉は、実は環境との相互作用による変化も含んだ言葉です。

ですので、たまたま不幸にも、少し扱いの大変な親の子どもに生まれたということは、子どもが自ら選んだわけではないですから、子どもの責任ではないですね。この子も大切にしようと思っただけでなかったら、健全な発育につながっていかないと思います。その最前線にいるのは皆さま方です。そこを自覚していただくこと。それがあれば、あとは、表1をちゃんと守っていただけるだけで、親との共通項というのは出てくると思います。

言い方を変えると、これはコピーライトフリーにしていまして、自分のものだと書かなければ結構ですので、「慌てない親」「欲張らない親」と書き換えて、親教育のあれに使っていただいて結構です。どんどん使ってください。この意味といいいますか、考え方の基本というのは大事だと思っています。

(5)基本に戻れ

最後にまとめますと、皆さま方がマスコミュニケーションとか、いろいろなメディアにつけられたいろいろな「垢」の部分で、「いまの親はこうだ」とか、「いまの子どもはこうだ」とか言われ信じてしまっていることを一回脱ぎ捨てて、一番の基本（ベーシック）をきちっと実行するということに戻っていただければ、自然に親とのコミュニケーションも、子どもとのコミュニケーションも活性化するというふうに思っています。ぜひ、そういう機会をつくっていただければと思います。

私の大学の恩師は昨年退官しました。何にも教えてくれなかった先生です。でも、ずうっと慕っています。なぜそうなったかという一番の理由は、一つだけ私の中にきちっとインプットしてくれたことがあったからです。「迷ったら基本に戻れ」という考え方です。そこだけは徹底的に鍛えられました。何かといたら「基本に戻れ」と。

卒論を書いていて、わからなくなり、どうやったらいいのか悩んでいるときに、基本書をもってこられ、「これから読み直せ」と言われたときには、冷や汗をかきました。でも、その教えというのはいまだに私は大事にしています。

こういう時代だからこそベーシックなものをもう一回きちっと見直す機会になっていただければ、それが本当に、寄り添うコミュニケーションづくりになるのだというふうに思います。

時間の中で精いっぱいのところしか言えませんが、ご理解いただければありがたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

前川 ありがとうございます。

3. 「子どもが育つコミュニケーション」

東京慈恵会医科大学名誉教授

前川喜平先生

前川 私はこのシンポジウムをもう十年以上、毎年やっていますけれども、一度やってみたかったのが「コミュニケーション」です。ところが、これは一番難しいのです。自分が企画した立場上、最も話し難い「聴き方、話し方」ということを話さなくてはならない羽目になりました。まあ、年の功に免じて当たり前の話を聴いてください。

(1) 聴き方、話し方は技術ではない

ご存じのごとく、人間は一人では生きられません。人と人との間で生活しているのが人間です。その基本が、非言語的・言語的コミュニケーションです。恐らく今日ここにいらした方々は自分の職場で、人間関係でいろいろと悩んでいる方が多いのではないかと思います。あるいは、子どもに対してこうしたいとか、いろいろなことがあるのではないかと思います。その一つとして例えば、相手が自分を理解してくれない、言うことを聴いてくれない不満があると思います。そういうときの原因は大概「あのお母さん」が、園長先生が、同僚が、悪いのが原因と思っている人が多いのではないかと思います。しかし、「それは本当でしょうか？」

ここで、ぜひ皆さんに知ってほしいのは、世の中には「変えられないもの」と「変えられるもの」があります。変えられないものって何ですか。「他人の考え」と「過去」です。変えられるものは何ですかというと「自分の考え」と「未来」です。そういう現実があるにもかかわらず、皆さんは毎日、他人の考えを無理に変えようとしたり、過去を悔やんだり、そういうことをしているのではないのでしょうか。ですから、まずそのことに気がついてほしいのです。

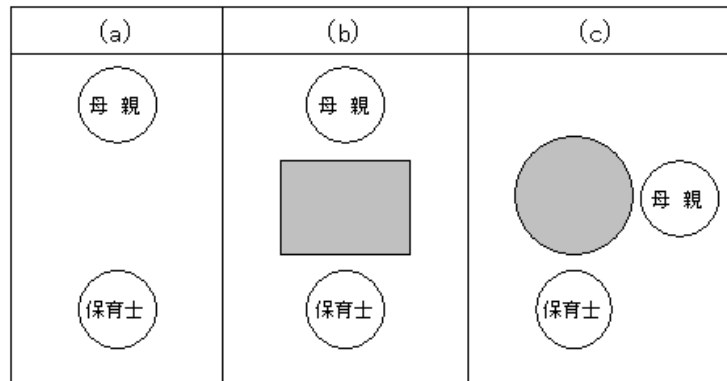
それから、人の心は「鏡」です。こっちが好意を持って肯定的に接すれば、相手も肯定的になりますし、こっちが否定的に接すれば、相手も否定的に接してきます。

ぜひ知ってほしいのは、人間関係に悩むのは、その聴き方や話し方、態度です。皆さん自身のそういうことに問題があるのです。相手じゃないんです。非常に厳しい言い方ですけども、まずこのことに気がついてください。自分が変われば相手も変わります。

ですから、話し方、聴き方は技術ではないのです。聴くことの重要性の認識です。いかに相手を受け入れるかということの、心、気持ちだと思います。

さて、質問です。聴き方と話し方とどちらが大切ですか。聴き方が大切だと思う人、手を挙げてみてくれる？（挙手多数）ああ、これはさっき小林先生が話したからね。話し方が重要だと思う人？、あまりいない。では、どうして人間は耳が二つ、口が一つあるのですか。いまの答えです。聴くことが大切だから耳が二つある。いたって簡単です。では、皆さんは聴き上手になりたいですか、話し上手になりたいですか。話し上手になりたいと思う人？ 誰も挙がらないですね。では、聴き上手になりたい方？（挙手多数）これだけ手が挙がると、次の話をする必要がなくなりました。しかし、これでは商売になりませんので、さらに次に進ませていただきます。結局、会話は双方向性なのです。聴くだけ、話すだけでは成り立ちません。少なくとも聴き上手になることを心がけてください。

(2) 会話をする前に



(図2)

さて、会話をする前に知ってほしいこと。例えば、**図2**を見てください。座り方、丸い机か、四角い机か。皆様がお母さんと話すときに、(a)という座り方、(b)という座り方、(c)という座り方、どれが一番好ましい座り方ですか。

(a)と思う人？ (b)と思う人？ (c)と思う人？(挙手多数)“ピンポン”です。

では、(c)というところで、部屋の入り口がお母さんの背中にあるのが1です。保育士さんの背中にあるのを2、あるいは、入り口がそれ以外のところにあるのを3としたら、どういう座り方がいいですか。1がいい？ お母さんが入り口に座る。あるいは、保育士さんたちが入り口に座るほうがいいですか。どちらが話しやすいですか。あるいは、両方とも奥のほうに相手を座れせるのが正解です。

座り方も、相手のことをいかに思っているかということの表現なのです。だから、話を聴くときには、なるべく相手を上座に据えたほうがいいのです。それから話を聴くときには、受け入れですから、斜めのほうがいい。これ、ごく当たり前のことです。

もう一つは、会話をする人の状態によって会話のムードが変わります。ですから、自分の体調管理を心がけましょう。喧嘩した後とか、病気ของときには体調が悪いですね。

基本は「聴く態度」です。話をいかに聴くかということです。それから、会話がスムーズに行くためには、「こんな話なんです」とか、確認とか、頷きとか、非言語的なコミュニケーションが重要だということです。

(3) 園におけるコミュニケーションの実際

保護者とのコミュニケーション

電話とかケータイは事務的な用件に限り、コミュニケーションは保護者と皆さんの会話を原則としてください。メールとかケータイというのはもっての外です。必ず生身の会話をしてください。

常に心がけてほしいのは、日ごろからの挨拶、声かけ、顔見知りになるということです。来園したら、「おはようございます」とか、「寒かったですねえ」とか、とにかく保護者と口がきけなかったらまともな会話なんてできっこない。

気をつけてほしいことは、決めつけ、思い込みなどの先入観は一切捨てることです。例えば、私たちは医者ですけれども、いろいろなことで「あのお母さんは」とか、よく看護師さんと話をします。そういう概念があって、先生と言われると何を思い出すかというと、日ごろの噂です。「おや、困ったな」とか、「どうして逃げようか」とか。

ところが、実際はそうじゃなくて、いかに決めつけ、思い込みが多いか。不思議なことに、人間というのは一度思い込んだらなかなか抜けません。で、それを持っていたら相手が敏感に感じます。そうしたら、

おはようと言ったときから敵が見方です。

では、どうすればいいかと思ったら、思いつきを消すための方法として、自分の興味を別に移すのです。「このお母さんはこんなお母さんだけど、ご主人はどんなご主人かなあ」とか、「どんな育ち方したのかなあ」とか、「あんなに痩せているけど、何食べてるのかなあ」とか、関係ないことを考えて見方が変わると、意外と公平な目で見られるのです。

ですから、自分が「この親」と文句を言う前に、自分の先入観を捨てて、どんな人とでも同じ態度で話すことを心がけてください。これは非常に難しいです。それから、話しやすい場と雰囲気設けること。あくまでも肯定的な態度で話すということです。

会話の最初は難しい話ではなくて、「今日は寒いですねえ」「いい天気ですねえ」「どこにお住まいなの?」「何でいらしたの?」「幼稚園で　　ちゃん、こんなことしていたので驚きましたよ」とか、なるべくいい話、相手が答えやすい話から入ります。

もう一つは、決して一回で解決しようと思わない。何回でも話す。最初はとにかく聴き役に徹して、話しているうちにお母さんの感情とか気持ちが動いたら、「それは大変ですねえ」とか、「つらいでしょう」とか、「そりゃ楽しいですねえ」とか、返すことです。

話した時点でどうも自分一人では負えそうもなかったら、上の主任さんとか、園長先生とかに相談して、話をして貰うことです。話をしているわからないときは確認することです。話をしているわからないことは相手の言葉で返すのです。「いま、ちょっと大変と言ったけど、どんなことですか?」と。そうすると話しの内容が具体的にわかります。

あとは、もし困った事があるのだったら、ミーティングのときでも、話してみんなと相談してどうするかを解決されたらいいと思います。

子どものコミュニケーション

子どもとのコミュニケーションは、日ごろから子どもと触れ合って、子どもの気持ちになって一緒に遊んで、子どもから好かれていれば、まず大丈夫です。それが基本です。そのときに絵本の読み聞かせとか、一緒に遊ぶとか、ふれあいを重視することです。

小林先生がさっきおっしゃったけれども、子どもが喜ぶのは、本能的に大人の顔つき、笑顔でわかります。この大人は私が好きだとか、嫌いだとか。だから、同じ目線でニコッと笑う。わざと笑いはダメですよ。本当にこの子がかわいいとか、好きだという気持ちで接すれば、子どものほうからのコミュニケーションはできます。

叱るのも、反対するのもいいですが、子どもの気持ちを聴いて、それから「どうして悪いか」を話し合うということです。それから、いいことがあったら話す。

もう一つ、ぜひやってほしいのは、子どもというのはすごく個人差があるんです。だから保育者の人の大部分は、底上げというか、無理に同じ年齢の子どもに合わせようとするのではなくて、その子どもを信じて、いかに発達を待つかということです。そういう態度が一番必要です。

ぜひ心がけてほしいのは、食事は楽しい雰囲気です。　　ちゃん、食べ方が悪いとか、好き嫌いがあるとか、丸飲みするとか、そんなことより、やはり楽しい雰囲気食べる。それから、周りの人がきちんとした食べ方をしていれば、食べ方というのはこういうものだなということが子どもはわかるのです。そのことをぜひ言ってください。

同僚とのコミュニケーション

同僚とのコミュニケーションにはメールは使用しない。生身の会話で行う。最初は聴き役となる。意見は質問の形で。わからないことは相手の言葉で素直に尋ねる。常に自分の聴いている態度に注意することと、

体調を整えること。人間だって100%ベストというわけではないですから、体調が悪いときは、「ちょっと風邪ひいて気分が悪いので、変なことを言うかもしれないけど、ごめんなさい」とか、前もってそれを言っておけばいいんです。素直につき合う。

目上の人とのコミュニケーション

目上の人とのコミュニケーションは、素直に気持ちを話してみてください。一番大切なのは、自分を守らないということ。こう言ったらどうだとか、こう言ったらああ思うかなんて考えない。自分を忘れて会話してください。そうすると意外とうまくいきます。何か言うときに、自分をよく見せたいんですよね。自分を忘れてしまえば怖いものなしですから。まあ、これには修行が要りますが。

子どもにしろ父兄にしろ、何かしてもらったら、「お話できてありがとう」とか、何とかでありがとうとか、「感謝」ですね。園長先生にも同僚にも何かしてもらったら、やはり「ありがとう」です。まずいことをしたら「ごめんなさい」ですね。

挨拶と、そういうことを常に心がけて、ふれあったことに敬意を表するとコミュニケーションはすごくうまくいきます。

(4)生身の会話(ふれあい)の重要性

科学が進歩して生活が便利になると、減少するのが「ふれあい」と「生身のコミュニケーション」です。ところが、人間というのは理屈だけで生きていられないのです。昔だったら自然に身についていた、そういう会話の仕方とかコミュニケーションが、努力しないと身につくこないのです。ですから、これからはぜひ聴くことの大切さを認識して、お互い心が通い合う保育をしていただきたいと思います。

最後に、「普通の会話から癒しの会話へ」。本当は会話というのはお互いを癒し合うんですね。ですから、ぜひ癒し合う会話に持って行ってください。

これで大体私の話は終わって、あとは、皆様といろいろな問題について討論したいと思います。ありがとうございました。(拍手)

4 . 総合討論

前川 皆様から休憩時間中に非常にたくさんのご意見、ご質問をいただきました。いま、私たちの力量では、とてもじゃないけど答えにくいような質問もたくさんあります。それをもとにして、三人で知恵を絞って考えていきます。それでは、一番ポピュラーなことで、一番答えにくい質問からいきます。

どんなに頑張っても嫌いな人がいます。生理的に受け付けず自然にかかわりができません。どうしたらいいでしょうか。

前川 どうでしょう？（笑）何かいいヒントはありますか、小林先生。

小林 私は、学生とかいろいろなところを含めて、よくそういうことを聴かれますけれども、「つき合わないければいいじゃないですか」と言います。別に自分がつき合わなくても、自分が生理的に嫌な方も、ほかの方とは仲良くなれるということはあるわけで、全部自分が上手につき合おうと考えているから余計嫌になるだけですよ、という意味なんです。嫌いだと思込んで、つき合おうと思うから嫌なんですよ。「嫌いだから、つき合わない」と思っつけてき合おうと、結構楽しいんですね。その原理がどこまでご理解いただけるかな、ということです。

私も、心理をやっていますけれども、人間とつき合うのがすごく苦手なタイプです。ずっと苦手です。こういう場では「役割」があるから言えますけれども、役割がなくなると何もできなくなってしまうタイプで、その一番の基本は、嫌な人とはつき合わない。いい人とは仲良くつき合うということ、ずっとやろうと心がけていて気がついたら、いい人と仲良くしていると、嫌な人もそこに入ってきて、一緒に話しているという場面が結構ありまして、結果的にうまくいくという法則だなと思っています。

だから、苦手だと思ふ人とは、とりあえず事務的なこと以外つき合わなければいいのかなと思いますね。答えになっているかな。

前川 いまの小林先生の答えで、保育園・幼稚園の保護者と保育士さんとの関係がこういうふうだったらどうしますか、ということがあるのではないかと思います。同僚でもあると思いますけれども。それで、例えば担任制でないときは、どなたか他の保育士さんとか、あるいは園長先生とか、主任とか、上の方と話していただくのも一つの手ではないかと思います。もし自分がその部屋にかかわっていたら、「まだちょっとよくわからないので、園長先生と一緒に話します」とか何か言って、それで話の取っかかりがわかって親しくなれば、嫌いだと思った人が何となくいいところがわかってきて、意外なところがあるのではないかと思います。「工夫をされてみたら？」ということはあると思いますけれども、もし無理してつき合わなくても済むのだったら、つき合わないのが一番いいような気がしますね。でも、そういう質問があって、それで済んじゃったらずるいですよね。離婚したいという人に、じゃあそうしなさいと言うようなもので（笑）あまり人生相談にはならないですけども、山田先生、どうですか。

山田 保育者の中で、とても人づき合いの上手な方がいるんですね。その方は、お母さんたちとの世間話から、子どものエピソードから、とてもよいお母さんとの関係をつくってくれるんです。それでも彼女が「まずい！」と思うと私のほうに振ってくるんです。

そういう形で、お母さんと保育者だったら、かかわり方、誰か役割をちょっと変えると、そのお母さんの見方も変わっていきますし、担任の先生だったら、うまくいかなかったら上の方にやっていただくという形で、感情を入れずに冷静に対応できる方がその役を担う。

また同僚同士でも、人数の多い幼稚園と少ない幼稚園では違うと思いますけれども、関係の作り方を工夫すると、あるとき、「あ、そういうことだったんだ」と気づくときがあるんですね。いままですごく嫌だったのが、「な～んだ、どこに気持ちがあつたんだろう」と、改善されるときもありますので、その嫌な思いだけでぶつかっているといつまでも改善しませんので、役割を振ってお互いにそれを担い合おうと、うまくいくこともあると思います。

最終的には、扱いにくいお母さん、扱いにくい方というのは私のところに来るのですが、私も、扱いにくい方とたくさん出会って、とても訓練されました。ボロクソに言われたこともありますし、思いが伝わらないこともありましたけれども、お母さんの場合は子どもを介してですので、「その子のために」ということです。「お母さんは嫌いだけど、この子は大事だから」「この子が大事だから、お母さんを大事にしよう」という気持ちで一生懸命誠意を持ってつき合っていくうちに、改善されていくことがたくさんあります。

そしてしばらくたって、「あのことがあってよかった」ということの結果をいただくと、また私の経験の一つにプラスされていきますので、私にとっては、嫌なお母さんと出会ったことは、いまはとてもプラスになっています。まだこれからたくさんあると思いますけれども、小林先生みたいにできればいいのですが、どちらかという逃げられない立場にいますので、「この子のお母さんだから愛していきたい」という思いで、その役を引き受けていけるのかなと思っております。

前川 いま言ったことでトライをしてみてください。気持ちを変えるとか、いろいろなことがあります。では、次の質問です。

「お互いさま」の気持ちが育っていない親に対して、どう対応したらよいか。わが子しか見えていない。「自分の子に嫌いなことばかりするので、ちゃんと遊ばせないでください」「同じ席にしないでください」と言い張ってくる。どう対応したらいいか。

小林 基本的なことでお話ししますと、親というのは、確かに子どもの発育に関して責任を持っていることは事実ですが、親は子育てのプロでしょうか。「それは違う」というのが原則だと思っています。だから、今日のテーマでもあります、「親と一緒に」ということを考えたときには、例えば親からいまみたいに要望が出たとします。それを、その子を主軸に置いて考えたときに、果たして妥当であるか、妥当でないかということ判断し、園としてどういう方針でやるかということを決め、実行することもすごく大事なことだと思っています。

ただし、そういうふうに行っているお母さんに直接お話しして、こういうことだからそれは違いますよと言ったところで、そう言っている方がちゃんと、はい、わかりましたと言うかといったら、それは言いません。なぜかといいますと、はっきり自分の子育てに自信があったら、誰々と遊ばせないでくれとか、そういうことは言わないのです。子どもにとって一番影響力を持っているのは誰かという親です。親が「ちゃんと遊んじゃダメよ」と言ったら、その子はちゃんと、「お父さん（お母さん）に遊んじゃいけないと言われたから遊ばない」と言います。

それを子どもは言っていないけれど、親が言っているというのは、実は「私は自分の子育てに自信がないんです、助けてください」というふうに親が言っていると理解していただいたほうがいいと思いますので、園は園の形として進めていくというか、園の方針に従っていくことを堅持していくのも大事だと思います。ただし、議論をする必要はないと思います。しばらくやっていく中で、その子どもの成長の姿を見て、母親・父親が理解をしてくれるのを待つことも大事です。

ちょっと余分なことを言いますと、「親と一緒に」という意味は、いままで保育園、幼稚園は、お子さんがある一定時間お預かりして、親の意のままにというか、何かサービスをしていくことが大事みたいな発想がどこかにありますけれども、そうではなくて、社会の大人として、人生の先輩として、保育園、幼稚園の職員・保育士の方が、その子に対してどういう子育てをしていったらいいのかということ、親と一緒に考えながら実行していくという立場になってほしい。もっとプライドと自信を持っていただきたいという思いも込めていますので、ぜひ、その辺はご理解いただきたいと思います。

前川 いま、子育て支援ということが非常に出ています。子育て支援には四つの要素があって、「子どもを育てること」と、「子どもが育つ環境をつくる」、「親育ちの環境をつくること」、もう一つが「親育てをする」ことです。この四つをその場に応じてかかわるのが子育て支援だと思います。ですから、そういうお母さんたちに対して、さっき山田先生がおっしゃったように、「ちゃんのお母さんだから」と言われると

感情のほうが出てしまいますけれども、それを押さえて公平の目で話を聴いてやっているうちに、子どもが変わってきて、親が変わってきて、だんだんわかってくるような気がしますが、どうですか。

山田 「やられた」とか、「あの子は」と訴えるお母さんのお子さんというのは、結構、仕掛け人じゃありませんか。

前川 そうです、そうです（笑）。

山田 意外と、やられたと訴える子のほうが仕掛け人だったりするんですね。現場でしばらく観察していると、たくさんそういう場面が出てきます。だから、実はこういういきさつがあるということをお話ししたり、また、どうしてそういう子たちが出てくるのかということをお話ししたりして、そういうトラブルを見守っていくことが、この時期にそれを経験することが大切なんだということをじっくり伝えていく。その子のためにそれはよかったことなんだ、ということをお母さんがポジティブに考えられるように、お母さんが受け入れてくれることを信じて話をしていくことがよくあります。

学期に一回、お母さんの勉強会という形で、できるだけ全員参加ということで集まっています。そして、どういう見方をするのが一番いいのか、乱暴な子どもに対する見方とか、すぐ泣いたり、逃げ出したりしてしまう子どもとか、そういう一つひとつの具体的なことをお母さんたちに学んでいただいて、それで、「待とうね」ということをお話ししていくと、いま前川先生がおっしゃったように、子どもが変わっていくんですね。変わっていくと、お母さんたちもなるほどと思ってくれますので、そこまで辛抱強く、お母さんが学んでくださることを根気よくお伝えしていくことがよく現場ではあります。

前川 私たちは子育て支援のことをやっていて、いろんな問題があるお母さんに対して、意識して幼稚園とか保育園でその子にかかわるんですね。結局、受け入れられていなくて、いろいろな不満やストレスで乱暴とかいろいろなことをするので、受け入れられると子どもの顔が笑顔に変わってきます。子どもの笑顔を見ると、どんなお母さんでも変わっていきます。だから、いま山田先生のおっしゃったことが一つのヒントになるような気がします。次に同じような質問あります。

園への要望書に毎回同じ内容の苦情 - 過去に自分の子がケガをして、その対応が不十分だったことをいつまでもこだわって - を言い続けている保護者（母親）がいる。園側も、またその当事者も、そのことではそのときにきちんと謝り解決したはずなのに。そのようなときに、再度、面接の時間を設けて話し合ったほうがよいのか悩んでいます。

小林 こういう親に対して、私はよく、「お母さん、お父さんがきっとコミュニケーションを求めているのだらうと考えてください」と言います。だから、定期的に会ってお話を聴くことを園の役割として考えてほしい。実を言いますと、これは結構つらいですね。だから、そのときに何時から何時までと必ず時間を設定して、時間厳守でやっていただく。

我々カウンセリングのプロでも、感情的にならずにきちんと話を聴ける時間というのは一時間半が限度です。皆さん方だったら、たぶん一時間くらいが限界だと考えていただいてもいいと思いますので、それくらいの時間でお話を聴いて、「では、またこの次も」という形で何回か繰り返していくうちに、徐々に変化するという例はたくさんあります。ですから、一気に解決しようと思わないで、また言ってきたということは、「ああ、そうか。話ができる人がいなくて寂しくなってるんだな」「ちゃんのために少し我慢しようか」という時間をたくさんとっていただくことも、必要な時代になってきているのではないかと思います。

それが、ある意味で言うと「親育て」ということの基本です。親育てと言うと、親はこうでありましょうという標語を並べ立てる人が多いですけれども、聴く人はちゃんとやってくれますし、聴かない人というのは、標語をいくら並べても意味がないのです。だから、講演とか何かをしても、本当に聴いてほしい人というのは来ないんですよ（笑）。それが本筋ですので、そこは現場として、そういうところに参加できたり、興味を持ったりということを含めて、それこそ親を孤立化させないように支援していただくことがすごく大

事かなと思います。

前川 親を指導とか何かというような考えで接すると、親はますます態度がかたくなってコミュニケーションが悪くなる。そうではなくて、さっき小林先生は一時間半とおっしゃいましたけれども、私は一時間半もたないですね。三十分でもいいから真剣な態度で聴くということから始められたら、いいのではないかと思います。聴く、聴く、聴く、しかないですね。あとは、相手の感情に反応して相手の心が動くようにすると、コミュニケーションがついてくると思います。本当に素直にぶつかり合われたら、何か解決するような気がします。

いま、支援教育で早期発見・早期治療が大切であると言われておりますが、子どもの発達にはいろいろな違いがあって、どうしたらいいのでしょうか。

前川 少なくとも五歳です。五歳までは、どんな子どもでもゆっくり発達を待ってください。決して決めつけることはありません。それだけです。むしろ親切心に決めつけると、いかに親が傷つきやすいかということだけを知っておいてください。支援教育対象の子どもたちの脳というのは、学校に行ってから使う部分のいろいろなことなのです。元来わからないわけです。生まれた赤ちゃんを見てすぐ、利口か何かもわからないでしょう。歩くようになってわからないので、それは無理なことなのです。

早く気がついてどうにかなるといのは、本来からそうじゃなくて、養育環境が悪くて（扱いが悪くて）子どもが多動になっているとか、人間関係が悪くて、いわゆるアスペルガー症候群とか自閉症に見える子どもたちだけです。しかし、そういう子どもは、慣れた保育士さんだったら敏感にわかんと思います。

「　　ちゃんはこういう子だから」という目で保育をしています。どのように見方を変えていけばいいのでしょうか。

前川 「　　ちゃんはこういう子だから」という目が、どういう目なのか……、難しいですね。いい意味で、例えば「のんびり屋さんだからもう少し待ちましょう」と見ているのはいいけれど、「遅い子だからどうにかしましょう」と見ているのでは、話が違いますね。

小林 ちょっと難しい言い方になりますけれども、「子どもというのは思ったようには育たない。ただし、思っているように育つ」という言い方をします。だから、　　ちゃんはこういう子だというふうに思っているというのは、例えば、それがポジティブでいいものだったら、私は構わないと思いますけれども、逆のネガティブな意味だったら、その子の未来をその先生は何の権利でふさいでいるのかな、と考えてしまいます。そこが非常に大事だと思っています。

前川 「子どもは親の言葉により育つ」といいますが、「親」の代わりに「保育士」と入れたいですね。言葉により育つということがあるので、「できるよねえ」とか、「いい子だねえ」とか、「親切だねえ」と言っていると、その子は親切になると思います。そういうことも言葉の魔力です。

山田 おっしゃるとおりだと思います。いいところを見つけて、「こんなことがあったのよ」ということを発見してみんなに報告する。その保育者はともかく褒める。ほかの保育者も褒める。そして、「こうだったんだって」とみんなが褒める。その子に対して一つの行為を褒めていくと、本当にその子は変わっていくんです。そして、嫌な部分とか、気になる部分というのが、そのことで消えていくことがよくあります。気にならなくなることがあります。

だから、私たちがどこに目をつけるかで随分違うと思います。困ることが十あると、一つの素晴らしいことがどうしても見えなくなってしまいます。親はしょうがないとしても、保育者はプロだから、やはりそれはまずいかなと思っています。

いまおっしゃったようなことを、私もよくお母さんたちに申し上げます。「うちの子はこうなんだから」と言うと、「そういうふうになるからね」とよく話すことがあります。だから、いつもよいところを見つけて、「そうだったんだ、すごいねえ」と言うと、そっちに傾いていって、一つずつ欠点みたいところは消えていきます。大人がどういう気持ちで、どういう目で評価してその子に言葉をかけているか、ということ

で変わっていくのだと思います。

小林 つけ加えますと、一歳半くらいから効果がありますけれども、子供さんが泣いたり、ぐずっているときに、「その顔、先生、大好き！ かわいいねえ〜」「笑ってるときもかわいいけど、怒ってる顔もほんと素敵だね」って、声かけしてみてください。ずっとそれをやっていると、面白いことが起こりますよ（笑）。私は楽しみの一つでよくやりますけど、一度試してみてください。答えは言いませんので、ぜひ。

受け入れる際に、保護者がこちらを全く見ずに子供を受け渡す人がいるのですが、その人とはどのように接すればいいのですか。

山田 先ほど申しましたように、お子さんに声をかけて、「おはようございます」、お母さんに「おはようございます」「お母さん、おはよう！」という感じで、なかなか難しいお母さんに関しては、積極的に「元気ッ？」という感じで親しく声をかけていって、だんだん親しい関係がつかれるといいなと思っています。

小林先生の「発育に寄り添う保育には」の部分（表1）を読む限り、現場で実際に取り組むのが難しいと思いますが、具体的にはどういうことですか。

小林 質問した方に申し上げたいのは、非常に厳しい言い方ですけれども、やる気ないのかなと思うだけです。これは私が、特別に学問的にまとめたのではないんです。現場の中で実際にやられてくるいいところとか、そこを全部集約していって、それも保育園、幼稚園、小学校、中学校で成功した例の中で、どういうところがよかったのかというふうに整理すると、こういう形になったということなのです。先ほども言いましたけれども、これは、多少勉強なさっている方だったら、保育のどの本を読んでも書かれている、全くの共通項だと思います。

あとは、逆に自分の中で、そういうことを実践の中でどうやったらできるかということ、それぞれの方が考える基本にしていただければと思って、今日、利用させていただきました。最後は「やる気」なんです。自分で逃げたらダメだと思っていますので、ぜひこれを機会に、逃げない保育士になっていただけないかなと思っています。

単純な話、人を支援する人間の一番の役割というのは、勝ち負けという言葉は使うべきではないと思いますが、あえて使いますと、我々は勝たなくていいのです。負けなければいいのです。単純なことです。決して諦めない。焦らず、慌てず、諦めずで、コツコツとやっていくことが大事で、その部分を集約するとこういうことになりますよということです。ですから、もしできないのであれば全部一遍にやろうと思わなくても、この中の一つだけでも自分の特徴にしようということでも十分だと思います。

こういうのって面白いんですけど、一つ始めると連鎖するんですよね。気がつくとなんとなくできるようになっている、というのが言えることです。私が一番言いたいことは、こういうことをちゃんとやっている方は、言葉は悪いですが、子供にもちゃんと甘えられる保育士になります。そうすると、同じことを子供との関係でやり合えるというか、「私は教える人、あなた方は教わる人」というのではなくて、子供との関係で相互関係が成立する形になりますので、初めからできないと思わないで、書いてあることの一つだけでもいいから、明日から実践しようとお考えになっていただけると、うれしいです。

保育園なのですが、朝の受け入れの際、子どもが泣いてしまい、保護者は子どもと話をし納得させたいようですが、保護者の方がなかなか離れないのと、子どももずっと親を求めています。

山田 親御さんがどのような思いで子どもとかわかっているのか。また、そのお母さんの子育ての方針の中にどのような思いがあるのかということがありますので、そのときに無理やり、また、その関係もよくわからないうちに、「こうあるべきなのに離さないわ」という形をとらないで、しばらく親子の様子を見守っていることがよくあります。親子関係に私たちは入り込めませんので、その親子関係の今までの様子とか、お母さんと子どもの信頼関係をしばらく見守っていて、だんだんお母さんもイライラしたり、本性をあらわしたりしたときに「このときかな？」と見極めて、「さあっ、行こうか！」という形でサッと連れていって「じゃお母さん、バイバイね」と離してしまう。

ちょっと待ってさしあげると、お母さんも子どもも納得するでしょうから、誰かが止めてほしいという、間みたいなものがあるような気がします。そういうときに上手に離して差し上げる。泣くし、お母さんも後ろ髪を引かれるかもしれませんが、「あとは私たちが預かるから、お母さん行って」という形で、その後のことをお伝えしたり、お母さんと具体的なことをおしゃべりしたりして、お母さんの気持ちを聴いたり、また、その後の子どもの様子も、大丈夫よということでお伝えして、安心していただくように時間をかけることがあります。

時間をかけたほうが、「急がば回れ」で早く解決できますし、お母さんも信頼してくださることが多いです。ですから、「このお母さんはこうなのよ」と決めつけるよりは、その親子関係を大事にしてあげて、そしてこちらの方針の中に引っ張り込むという形をとったほうがうまくいくことが多いと思います。いかがでしょうか。

前川 ぜひ、参考にしてください。

来年度から体育指導の教師を招き、週一回、三歳、四歳、五歳児に行うことになりました。根本的な保育を考えることなく進めることに不満ですが、自信を持って小学校に行けるよう云々ということです。何でもできることは自信になるとわかりつつも、何か違うと思ってしまうのですが。

小林 ちょっと方針だけ聞くと、何でもできるようになって小学校に行きますと、たぶん、小学校の先生は迷惑でしょうね。(笑)ただ、体育ということで、体を動かすことを幼稚園、保育園でたくさんしていただくことに関しては私は大賛成です。私は心理屋ですけれども、「心の時代」という形で、いま、心のことばかり言っていますが、その間に、自分の体を十分に自由に動かせる能力の欠如した子どもというのが出てきました。その結果、心も歪んでいくという方向になっている場合が結構多いもので、特に幼少期の絶対運動量を確保していただけることは大切だと思っています。

実際の例としましても、園にたまたま見に行ったときに、多動のお子さんがいまして、いまのお医者さんが診られたら、注意欠陥・多動症候群みたいなお子さんですけれども、年中さんでなかなか落ち着かなくて、保育士さんが大変だと言いましてね。私は冗談で、まさかそんなことをやる人はいないだろうと思って、「この子、一日二キロくらい走れば落ち着いて座ってられるよ」と言ったんですね。そうしたら、マラソン大好きな保育士さんがそれを真に受けまして、「この子がいいなら他の子にもいいはずだ」という話になりまして、年長さんまで全部引き連れて毎日二キロ走ったら、その園がものすごく落ち着いていい園になった。これは、神奈川県で、本当にあった例です。

それくらい実は運動量というのは大切なのです。だから、方針とか何かというところは表向きのものとして、本音の部分として、子どもが体を動かして自由に遊ぶ、そういうことを覚える時間を週に三日とっていただく。それを保育士である自分がしないで、専門の人にやってもらえるならいいな、というくらいの感覚で見守ってあげることも大切かなと思います。そうすると、体育の先生も大体同じような方向に行きますので、そんなふうに考えていただければと思います。

前川 いま小児科の私の発達外来には、「歩き方がおかしい」という子どもが非常に多いのですが、その大部分は運動不足です。本来だったら当然土ふまずができるのに、できていないのです。ただ、運動させるのはいいですけれども、個人差がありますから、遅い子とか、いろいろなことができない子が自信がなくならないような配慮をすれば、動かすことはいいですね。もう一つ朗報は、運動能力が伸びると普通の人は知的発達も並行します。そういう意味でポジティブに考えて、扱われたらいいのではないかと思います。

目上の人とのコミュニケーションの中で「自分を守らない」とありました。とても納得できたのですが、では、目下とのコミュニケーションで指導しなければいけない目安はどんな点に気をつけたらいいでしょうか。

山田 まず新学期が始まるときに、年齢関係ない、経験関係ない、自分が思ったことは思ったときに言いましょうと、どの先生にもお伝えします。そして、やりたいと思ったこと、これはおかしいと思ったことも、

何でも言ってくださいと、お話しておきます。そして普段の生活の中で、「この子をこういう目で見ていな」「あ、ここのところを見てくれているな」と思うときには、子どもと同じで、褒めます。そして、「こうしてくれてありがとう」とか、「この子のことよく見てくれてたね」と。一生懸命やって足りないときは、「頑張ったけれども、ここは注意してちょうだい」と。

それで泣かれたことがあったんですよ。一生懸命やって、「完璧！」ってやったんだけど、もう一つというところがありましてね。「よく頑張ったね、でも、ここのところはもう少し気をつけてほしかった」と言ったら、「こんなに頑張ったのに」ってワーワー泣いた職員の方がいました。でも、決して恨まれずに、「今度は頑張る」という形で、より発奮してくれて、子どものために本当によく働いてくれています。

ですから大人も、悪い言葉を言われるよりは（笑）やはり褒められたほうがうれしいと思います。年を取っても同じだと思います。本当にドキドキして、すごくまずいと思いながら、前川先生は上手でいらっしゃるから、よくおっしゃってくださったので、ちょっと安心したのですが、「それでよかったんじゃない？」と、ひとこと言われるとホッとします。そのひと言をかけて差し上げると、次の言葉が使いやすい。「でも、ここを気をつけたほうがいいんじゃない？」ということが入っていくと思うのです。

カチンカチンのものというのはなかなかそこに染みにくいですが、大根でも下ゆですると味がしますね。一回やわらかくして、そしてはっきり、「こうしたほうがいいんじゃない？」とお話すると、「あ、頑張ってみよう」という形をとられると思います。まず、認め合うことの基本を年長者が教えて差し上げると、そのことを覚えていらっしゃるのではないかと思います。これは、若い保育者を育てる基本ではないかと私は思っております。

前川 ここにいらっしゃる方は、山本五十六という人をあまり知っていないのではと思いますが「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば人は動かじ」ということを言っています、このひと言だと思います。

三歳の子どもで、常に興奮したり、うれしかったりするときも、相手の顔をつねったり叩いたりする子がいます。「それはいけないのよ」などの言葉で丁寧に知らせていますが、よりよい対処の方法があれば教えてください。

小林 問題行動の子どもさんを見ると、私は、「その子は、正しいやり方を教わっていなかったり知らない子だと考えてくれ」というふうに言います。人間が本能的に行動すると大体攻撃行動になって、叩いたりつねったりとなってしまいます。そのときにちゃんと大人のほうが見ていて、解釈してあげて、「うれしいときはこうやってやるのよ」というのをして見せて、教えて、それを根気よくしていただくことが大事だと思います。そのときに注意喚起として、「ダメッ」ということを言うことは間違っていないと思います。

いま、あえて「注意喚起」という言い方をしましたが、叱るのではなくて、「そのやり方は違うんだよ」ということを注意喚起する意味で「ダメ」という言葉を使っていくことは構わないと思います。でも、その後には必ず、「こういうときはこうやってね」と。最後に「そのほうが先生もうれしい」とか、「私も ちゃんのこともっと好きになれるからね」というようなことをつけ加えていくことをきちんと繰り返せば、大体の問題行動は消失します。

ただ、なかなか違ってこなく見えるというのは、実はそういう問題行動の基本というのは小さい頃の親の子育てから始まっていますので、そう簡単には変わってきません。でも、そこで変えてあげないと、その子が一生苦労することになります。だからこそ、その場、その場で短く注意喚起する言葉を入れて、すぐその後「こういうふうにしたらいいんだよ」ということを教えてあげる。最後に、「わかってもらえてよかった」とか、「もっと好きになれるよ」ということをちゃんと伝えていく。その三つを確実にやっていただくことが大事です。

きついことを言いますが、保育園、幼稚園を回って保育士さんのことを観察していると、子どもに何かしてもらったときに、ハイと受け取る保育士が非常に多いです。わかりますか。何が悪いの？ と思うかも

しれませんね。なぜそのときに、ひと言、ありがとうとか、ご苦労さまと、声をかけてくれないのかなと思う方がものすごく多いです。

極論を言うと、私の回っているところで大体七割の保育士は、「　　ちゃん、何々持ってきて」と言って、持ってきてくれた途端に、ハイッて受け取るわけです。そこもいま言ったことと同じ精神で考えたら、「ありがとうね」とか、「今度はこうやって渡してね」とか、いろいろなことを教える機会になりますので、ちょっと気をつけていただけるとうれしいなというふうに思います。

若いお母さんの言動が自由闊達で、言葉遣いを日本語に置きかえて直してあげたいのですが。

職員から相談されやすい、話しかけられやすい資質、方法があったら伺いたいのですが。

山田 保育者の方はどのような言葉遣いで普段、生活していらっしゃいますでしょうか。ともかく子どもたちは、日中ほとんど幼稚園、保育園にいるのですから、保育者どうしの会話、言葉遣いが子どもにとっては大きいのではないのでしょうか。ですから、子どもが気づくと親も気づいているかもしれないと思います。

私たちも、うっかり言ってしまうことがあるじゃないですか。「　　ちゃ～ん」なんてやったほうが、すごく表現として親しくていいときもあるけれども、子どもにこの真剣さを伝えたいというときに、ペラペラため口でしゃべっていけば子どもに伝わらないと思うのです。やはり子どもたちにこの真剣な思いをきちんとした言葉で伝えると、子どもも、あ、これはきちんと聞かなきゃいけないんだという思いになると思います。

子どもの話を聞くときも、きちんと聞いてあげることが大事です。若い保育者に家の悩みを打ち明けた子どもがいるんですね。家庭のお父さんとお母さんのことを保育者にペラペラ相談した子がいたこともあったのですが、心を開けば、子どもたちも心を開いてきますので、私たちが子どもとの言葉のやり取りをきちんとしていく。そこが基本なのではないでしょうか。私たちがお母さんに対して、きちんとした言葉がけと、きちんとした言葉の受けとめ方をしていくと、「気づく」ということが起きるのではないのでしょうか。だから、保育者の態度、言葉遣いの影響はかなり大きいのではないかと考えております。

前川 多数の意見で、いまのテレビのギャグ番組といいますが、頭を叩いたり汚い言葉を使うのも影響がある、という意見が見られております。参考までです。

乳児保育で担当制をとることが多いのですが、コミュニケーションを取る上で担任制とどちらがよいのですか。

前川 乳幼児は、なるべく特定の人と結びついてお互いの情愛の絆をつくったほうがいいんですね。ですから、ある程度決めていい場合のことがあります。以前、「タッチケア」の話で吉永先生が話された（ふたば69号参照）ある保育園で問題行動のある方に、担任の保育士さんが昼寝のときに、タッチケアでさすったら、それで問題行動が治って、今度は昼寝もするようになった。だけど、その人が用があって休んでしまって、別の保育士さんがやったらダメだった。そういう意味から言うと、やはりある程度のことも必要なような気がしますけれども、ケース・バイ・ケース……。小林先生、どうですか。

小林 基本的に乳幼児期というのは、安心の源が「人」であるという概念で考えています。一番身近な安心の源は親ということになりますけれども、理論上、考えたら別に親でなくてもいいんですね。誰か、本当に安心できる環境を持てる人が近くにいてくれることが大事で、そういう意味で言うと、保育園の保育士さんはすごく重要な位置関係を持っていると思っていますので、できるだけ固定的な人間関係を大事にしていたくことが大切だと思います。

ただし、現実問題として考えたときに、それは理想だけできないというのがあるんですね。そういうときには、できるだけ少数のグループという形で考えていただけるといいと思います。つまり、一定の部分を二人ないし三人くらいで同じ気持ちでケアする。そこまでが限界だろうというふうに思います。ホスピタリズムの原型、一番のものは、そこがとれなくて、いつも集団対集団でかかわっていくところで起きる問題性で、それがいまのネグレクトとかそういうものに発展していくのですけれども、その原因になっています

ので、担任制、担当制というのは大切にしていきたいという思いは強いです。

困った職員がいて、その職員にどう気づかせたらいいか

前川 このような質問が、二、三あります。「居すわって辞めない」とか、ここではちょっと紹介できそうにない具体的な質問がありますが。(笑) どうしたらいいですかね、職員で困った人がいたときに。

山田 普段の関係ができていなくて、それだけ批判のようにボンと出てきてしまったら、やっぱり受け入れられないと思うんですね。でも、普段の関係をやわらかくつくっておくことはとても大事なことだと思います。子どもが信頼して大人にぶつかる。子どもが「信頼する」ということを覚えるためには、大人が信頼し合っていなければ絶対にこれは伝わるものではありませんので、私たちがまず信頼関係をつくることに努力することは、それだけで、子どもに人間関係のコミュニケーションのあり方を教えるのと同じことだと思います。

ですから、同僚とかその辺でうまくいかないときには、上の方が中に入って、おしゃべりをしたり、お茶を飲んだりしながら、ちょっと気づかせてあげる。そしてやわらかくなったときに、だんだん話していくと、意外とたくさん悩みを持っていて、実は深かったりするんですね。「ああ、そこで泣いたかあ」というときもあったりして、「実は抱えていたんだ」ということがよくあります。できれば、そういうものが吐き出せる場面をつくって差し上げると、その方が内側を吐き出すことができ、次のステップに行くこともできますし、その方が相手を信頼することができるように、自分も動くことができるようになったらいいのかなと思います。

その辺のところ、年齢差のある職員間で役割を上手に果たされるといいのではないかと思います。同じところで言いにくい部分は、年長者の方に役割を担っていただくとか、そういうふうな形をとって上手にコミュニケーションを図り合って、その方も楽になることができたらいいのではないのでしょうか。本当に「気づき」ってすごく大事だと思うんですね。

いま「KY」という言葉が盛んですが、初め全く意味がわからなかったんです。ほんとに遅れていて、「ああ、KYってそういう意味だったんだ」なんていうことですね。前川先生がずっとおっしゃっておられますが、人間同士、生身の声というのが少なくなっている。それこそ、いま、お母さんたちに伝えと、ケータイの一斉メールで全部回るんですよ。連絡網が要らなくて、一斉に伝達できてびっくりしてしまいます。でも、それというのはただの連絡事項であって、人間関係ではないですね。やはり誤解が生じないために、生の声を使い合うことを保育者が気を遣っていくと、努力がすごく実るのではないかと考えております。

吃る子にはどのように接したらいいでしょうか。

前川 吃る子どもは、目の高さまでしゃがんで、ゆっくり話を聴く態度で治ります。話を聴くということ。仁王立ちみたいに立って「早くしゃべりなさい」なんて言ったら、吃ってしまいますね。子どもを受け入れる姿勢です。

それでは、最後のまとめに入らせていただきます。

「コミュニケーション 親と一緒に子育て」というのは、技術ではないんですね。心と人間性の問題と、コミュニケーションの重要性をいかに理解するか。相手の立場をいかに受容するかということの根本的な人間関係の基礎です。今日の内容は、困ったときに読んでいただくと参考になることがたくさんありますので、もう一回学習し直してください。

できないとか、ネガティブに考えないで、ぜひ、気持ちを持って接する。こっちが変われば相手は必ず変わります。それから、純真な子どもの心を伸ばすといいますが、笑顔を守るために、ぜひ、子どもと一緒に保育、親と一緒に発展させていただけたらと思います。

今日は長時間、非常に難しい問題を討論いただきまして、ありがとうございます。講師一同、心から感謝いたします。ありがとうございます。(了)

講師紹介

前川 喜平（まえかわ きへい）

神奈川県立保健福祉大学大学院研究科長、東京慈恵会医科大学名誉教授。

東京慈恵会医科大学卒業後、同大小児科教授を経て現職。

1996年より（財）母子健康協会主催 シンポジウム 統括を務める、同協会理事。

日本小児保健学会理事、日本小児科学会理事、日本小児神経学会理事等。

主な著書に「小児神経と発達診かた」(新興医学出版社)、「乳児検診の神経学的チェック法」(南山堂)、小児の神経と発達診かた」(新興医学出版社)など。

小林 正稔（こばやし まさとし）

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部社会福祉学科教授。

愛知学院大学文学部心理学科卒業後、社会福祉法人「進和学園・成人寮」(知的障害者施設)生活・作業指導員、神奈川県立中井やまゆり園生活指導員、国府実修学校(教護院：旧法)寮長、児童相談所心理判定員等を経て、現職。

神奈川県教育委員会不登校対策委員会委員・ワーキング部会座長、横浜市教育委員会いじめ等対策会議委員、横須賀市家庭児童相談専門委員、横須賀市児童相談所専門委員、秦野市人権施策推進会議議長、秦野市行政評価委員、秦野市次世代育成地域支援協議会会長、川崎ソーシャルスキル教育研究会最高顧問等。子育て相談や、保育、幼児教育等のアドバイザーとして、また小学校・中学校等で教師に対するコンサルテーションや指導上のアドバイスをしています。さらにスクールカウンセラーへの支援やアドバイスも行っている。

山田 雅井（やまだ まさい）

私塾「まきば」主宰(幼児教育保育塾)

1971年日本女子体育短期大学保育科卒業

学校法人「聖ステパノ学園・幼稚部」勤務、社会福祉法人「エリザベス・サンダース・ホーム」の子どもたちの保育に携わり、故澤田美喜先生の薫陶を受ける。

私立山王幼稚園主任経論を経て、1996年私塾「まきば」を設立。コミュニティにおける幼児の健全育成の活動を続けている。